



鳥塚莞爾先生を偲んで

遠藤 啓吾

核医学，アイソトープの医学利用の分野で多大な貢献をされた鳥塚莞爾先生が，7月27日肺炎のため逝去されました。86歳でした。門下生のひとりとして謹んで哀悼の意を表します。

先生の業績は膨大ですが，1950年代後半の¹³¹Iによる甲状腺の診断・治療の研究から始まり，^{99m}Tc製剤を用いる画像診断に，さらに1972年京都大学医学部放射線科教授に就任すると，脳，肺，心臓，骨，消化器など全身の画像診断に対象を広げました。

1980年代に特に力を入れたのがPETとMRIです。その当時の優秀な大学院生の研究テーマはまずPETでした。国産PETカメラの放射線医学総合研究所との共同開発から始まり，新しいPET薬剤の開発，脳から心臓，全身のがんのPET診断の臨床的有用性の検討，さらにPETの保険収載，保険適応の拡大まで，鳥塚先生の大きな功績は全ての関係者が認められ，我が国の現在のPETの隆盛は先生抜きには考えられません。

先生の長年の盟友である米国核医学会の巨匠ヘンリー・ワグナー教授も昨年¹³¹Iに逝去され，日米の偉大なPET指導者を相次いで失ってしまいました。

京都大学教授から福井医科大学学長と管理職としても活躍され，また日本アイソトープ協会理事を長年務められ，日本核医学会，アジア大

洋州核医学会，日本医学放射線学会，日本内分泌学会などの大きな学会も会長として主催されました。これらの功績に対し，2002年には勲二等瑞宝章を受章されました。

研究者としても組織の管理者としても超一流の業績を残されましたが，最も素晴らしいのは教育者としての鳥塚先生です。人を引きつける魅力ある人柄で，優秀な多くの人がいつの間にか先生の周囲に集まりました。医学生も同様で，先生を慕って京都大学医学部卒業生100人のうち10人以上が入局し，内科や外科よりも放射線科，核医学科の研修医が多かった年もあるほどで，医局は優秀な若い医師であふれていました。先生はその若い医師を一流の研究者，臨床家に育てるのが天才的に上手で，研究に向いている者には研究をさせ，臨床に向いている者は一般病院の放射線科部長として赴任させました。鳥塚門下から多くの教授を輩出したと言われるかもしれませんが，晩年はその成長を楽しみにされていたようにも思われます（本誌2003年2月号「私のRI履歴」参照）。

家庭では恋愛結婚された同年齢の睦子夫人との間に3人の子供に恵まれました。長男の達郎先生（浜松PET診断センター）は，PETによる肝臓癌，膵臓癌，悪性リンパ腫の画像診断等で優れた業績を発表されています。また先生が逝去された洛和会丸太町病院は，孫の采野優先生^{うねのゆう}の研修先病院でした。采野先生はNHKの人気番組「総合診療医ドクターG」（8月2日放送）に3人の研修医のひとりとして出演され，鳥塚先生ゆずりの名回答をされていましたが，研修を修了した後は臨床腫瘍医になりたいと話されていました。甲状腺から始まり，PETを中心とした全身の画像診断に幅を広げた鳥塚先生です。将来は臨床腫瘍を専門としたいというお孫さんの希望を楽しみに聞いていたことでしょう。

40年余りの公私にわたるご指導に感謝しつつ，先生のご冥福をお祈りいたします。

（京都医療科学大学学長，群馬大学名誉教授）